

詩

鉦長室から

三川 すぎもと かつお



さまさまな時を刻んだ

ホッパーのすく横

旧三川鉦運炭場

どれほどの化粧をしたとて

壁にしみじみた

石灰のいびつな 臭さと

血の 臭いを消すことはできない

その壁のなかで

アメリカ生れの 素性の知れた

ミサイルや宇宙ロケットの副産物

「ND」の味も 悪くはないが

岩粉ふれ

柱打て

そんな大きな態度が気に入らん

六千人—二万トンの

血祭りの 首切りだあ

これで悪けりゃあど丁のくか

これで悪けりゃあど丁のくか

もうけもん

味も いっそ引き立つというもんだ

六月九日

三池のたたかい以来の

汚れた手が 覆面パトカーを走らせ

心と ぶたり引立って行つた

けられたら「腹のたつやうか」

長い—怒りは頂天となす

純々と

ミヤウラの抗長室を埋めた

熱気は

厚いコンクリートの壁をも

うちくたくかのように

ほとぼしした

とりまく 数十、百の取制

かれらにも また

削減、縮小のパンクがある

宮浦は「おかしなかい」ともいっ

入・昇坑の坑夫は 考える

どっちが「ほんなんかんか」と

その時間—

泡をくい、あわて

山の上クラブの 密議がはじまる

百十三日のたたかい

三池のたたかい

その同じ場所

顔ぶれは変わったが

いせん 謀議はつづく

これらの さまを

はじめて見る坑夫

ふたたび見る坑夫

三たび見る坑夫

まなきしは 機でははないが

胸の 高なりははげしく

その波動を

確かに伝えてゆく

(一九六九・六・二二)

闘いと弾圧の記録

五月十三日、三井三池の会社側が八人の三池労組員(宮浦指導部)に不当処分(二人懲戒解雇、六人出勤停止)を加えた日から、六月十七日福岡県警の機動隊を中心とする警官隊による、座りこみ中の三池労組員の排除に至るまでの一連の弾圧は、ますます命を守る闘いの封殺にあつたが、経過は次の通りである。

闘いの封殺ねらった「挑発」

五月十三日 会社、宮浦指導部に所属する三池労組員の大層処分を強行。懲戒解雇二人、出勤停止三日、十五日が六人で、対象者は組合執行委員一、中央委員二、代議員五というように、活動者ばかりだった。会社がいう処分の理由は、四月二十八日宮浦鉦分層任職部内の繰りこみの際、徳田主席係員が「名前を呼ばれたら返事をしなさい」といったのに、従わなかったのが「業務阻害だ」「団交の席での会社側説明」というのであった。その日から前任者にかわって繰りこんでいた同僚員が、返事をしな

なかつたことを理由に、八人の三池労組員を繰りこまなかつたこと「なせ繰りこまなかつたことをせよ」との押し問答になり、そこに二十数人の取制が突如押しかけてきて紛争をひき起こし、四人の三池労組員が加藤三日十七日を要する暴行を受けた。もともとこれほどの繰りこみに当っては、まず各人が繰りこみ札をかえすことで、出勤が確認されていることでもあり、ことさら返事などせずに入坑していた。ところが徳田主席係員は、難くせをつけてきたのである。だから、この日記きた紛争は明らかに会社側が仕組んだ挑発だったとするほかない。

職制の背信行為に怒り爆発

六月九日 突然この日早朝、大牟田警察は会社がさきに解雇した二人の活動家を自宅に襲い逮捕した。これは許すことのできない、会社側の背信行為だった。なぜなら処分問題に関する組合—会社間交渉の中で、会社としても再三にわたって「刑事事件にする意図はない」とことを、言明していたのだから。

宮浦包み全山で強まる闘い

六月十二日 さすがに、三池労組の釈放要求の正しさが置かれ、この日の夕方逮捕された二人の仲間が釈放を勝ち取った。あくまでも拘留をひきのばすという検事側の策謀が、裁判所によって見破られ封じられたのである。

警官隊千人 組合員を襲う

六月十七日 この日の午前中に三池労組は、福岡県機動隊による弾圧のたぐひのあることを察知し、たぐひなく全面ストライキを指令、宮浦の座りこみを断固防衛して抵抗することにした。スト突入の組合員はたぐひなく宮浦にかけつけ、宮浦鉦総合事務所を埋めた。屋上に赤旗がひるがえった。

ヤジが渦まく中を通過、ピケ隊の侵入

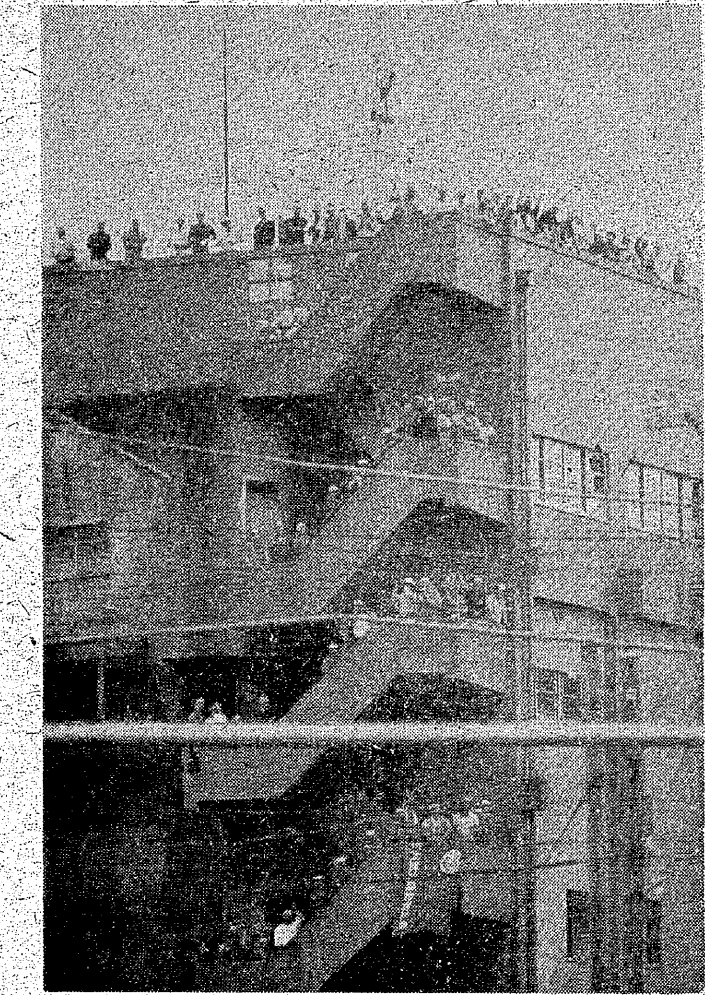
彼らはあの乱闘に身を固めたうえに、手に手にピカピカ光る例の桶さえ用意するという周到さがあった。みんなの中から「お前らは、俺たちをだれたと思つてるのか。俺たちは暴徒ではない。正しい権利にもついで、命を守るため堂々と闘っている労働者だ。帰れ」の声があがった。

彼らはあの乱闘に身を固めた

彼らはあの乱闘に身を固めたうえに、手に手にピカピカ光る例の桶さえ用意するという周到さがあった。みんなの中から「お前らは、俺たちをだれたと思つてるのか。俺たちは暴徒ではない。正しい権利にもついで、命を守るため堂々と闘っている労働者だ。帰れ」の声があがった。

午後三時五十分、警察隊実行行

彼らは鉄のパイプや大槌や、とび口、ボールなどを使って鉦長室のドアをぶち破り、堂々と座りこみをつづける三池労組員に襲いかかり、一人ひとりを「ボー」板きにしては屋外にひきずり出した。しかもこの実行行は、鉦長室での闘争を責任をもって指揮していた古賀書記長と、警察側の総責任者との間で最後の話し合ひの結果、「座りこみ中の組合員は全員、堂々と自主退去をするから、実行行も行なわぬ」という決定を見た直後に、それをひきずり行なわれたことは注目を要する。



宮浦鉦長室の座り込みは、全山の組合員から支えられ闘い抜かれた。

警察側はこの弾圧の間、古賀書記長以下二十一人の仲間を逮捕し、二十九人の仲間を重傷を負わせた。しかも右の逮捕に当っては、機動隊の中にまじってやってきた取制が積極的になり、いちいち指して協力したことを見のがしてはならない。これは明らかに七十年安保にそなえる支配層の弾圧であるとして、社会党をはじめ炭坑九州、福岡と熊本両県評、大牟田、荒尾の両地評が一九七〇年になって共同体制を確立、三池労組の闘いを支援する闘いとなった。